

関ヶ原合戦と美濃・尾張

龍谷大学文学部
山本浩樹

はじめに

- ・慶長5年(1600)におきた「天下分け目の戦い」は、最初から関ヶ原が主戦場となるものと決まっていたわけではない。この合戦に参加した東西両軍の武将らの中でも、そうなることを予想しえた者は少なかったはず。
 - ・6月、徳川家康が、謀叛の嫌疑で陸奥会津に帰国中の上杉景勝征討の号令を発し、大坂より出陣。同年7月、居城である近江佐和山に蟄居中の石田三成が美濃垂井の宿で越前敦賀城主大谷吉継を勧誘し挙兵。その後、三成らは大坂の三奉行(増田長盛・長束正家・徳善院玄以)を味方につけ、西軍総大将となる毛利輝元を大坂に迎えて臨戦態勢を整え、三奉行連署による「内府ちかいの条々」を発し、全国の大名らを西軍に勧誘(史料1)。
 - ・7月25日、家康は会津攻めに向かった諸将を下野国小山での軍議に招集。三成らを打倒するため、ほぼ全軍が反転し上方に向かう(東軍)。清須・岡崎・吉田など東海道沿いの諸城を家康が接收して譜代の番衆を入れ置き、大名らから人質を徴する(史料2・4)。濃尾では、岐阜城主織田秀信、尾張犬山城主石川光吉が西軍に属し、秀信の与力格であった郡上の稲葉貞通、黒野の加藤貞泰、岩手の竹中重門らも犬山の守備に加わる(史料0・1・22)。
 - ・8月中旬には、東軍諸将が尾張清須などに着陣し、木曾三川を挟んで東西両軍が向き合う形勢が固まる。
- ⇒永禄初年から同10年(1567)にわたる斎藤義龍・龍興と織田信長の攻防、天正12年(1584)の羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康連合軍の攻防(小牧・長久手の戦い)と状況が酷似。
- ※永禄年間の斎藤・織田の攻防(戦国大名間の「国郡境目相論」)では、犬山城の織田信清が斎藤方となり、織田(信長)勢の美濃侵入を阻む。信長は西濃の高木氏・市橋氏らと誼を通じ、斎藤氏包囲網形勢を図る。永禄8年(1565)に信長が犬山城を攻略。さらに中濃の金山城などを奪取し、加治田城の佐藤忠能らを味方につけるなどして優位に立つ。永禄9年の河野島の戦いでは悪天候の影響もあって苦杯をなめるが、翌年、斎藤氏重臣でもあった西濃の氏家・稲葉・安藤を味方につけ、ついに稲葉山城を攻略。
- ※「国郡境目相論」から天下分け目の戦いへの過渡期にあたる天正12年の攻防では、信雄追討の兵を挙げた秀吉に、3月、大垣城の池田恒興が呼応し、城主の留守を衝いて犬山城を奪取。信雄と同盟する家康は小牧城の守りを固め、楽田城を中心に展開した羽柴勢と対峙。4月に恒興らによる三河中入作戦が失敗した(長久手の戦い)後、戦線膠着を打開するため、秀吉は5～6月に尾張西部に移動し加賀野井・竹鼻両城などを攻略するが、吉里城の吉村氏吉らに阻まれて深入りできず、さらに戦線は膠着。6～7月には滝川一益が九鬼嘉隆の水軍の後押しで蟹江城を占拠するが、徳川軍の反撃を受けて開城。8月以降、羽柴勢は再び尾張北部に展開し、和睦(惣無事)に向けた交渉も始まる。10月、北伊勢に出陣した秀吉は、11月始めに桑名へ到達し、信雄の居城長島城を圧迫。信雄が講和に応じ、戦争終結へ。
- ・天正12年の戦いでは、鳥羽城主九鬼嘉隆の水軍が伊勢湾岸・伊良湖水道で威力を発揮。慶長5年の戦いにおいても、嘉隆配下の水軍が伊勢湾岸を席卷する勢いを示す(史料0・22・28)。

1 西軍の尾張・三河侵攻計画

- ・7月、美濃・伊勢の諸城が西軍方となり(史料0・1・22)、木曾川筋を隔てて東西両軍が対峙する形勢となる。8月上旬、三成は美濃口・伊勢口・北国口・勢田橋爪在番(上方方面軍)と、各方面に展開する西軍の陣立を決定(図1)。

- ・ 8月上旬には関東から反転して西進してきた諸勢が清須城など尾張国内に陣取る。三成は、その一部が西軍に与するものと期待し、彼らの所存を確認した上で帰参を認める考えを味方に示す（史料3・8・11・12）。清須城の福島正則が西軍に与した場合は、尾張を拠点に三河まで出陣し、正則の内応がなかった場合は、美濃口・伊勢口双方の軍勢により尾張攻略をめざすこととする（史料8）。家康が西上する際、輝元を浜松辺りに出陣させる案も検討か（史料12）。
 - ・ 尾張侵攻への地ならしとして、三成・秀信が飛保の曼陀羅寺に禁制を発給（史料14・15）。黒田城主一柳直盛の内応を誘ったほか（史料37）、小折在住の尾張衆＝「秀頼之馬廻衆」生駒利豊も味方に勧誘（史料35）。
 - ※濃尾国境の木曽川の渡し場で「人留」「船留」が実施される中（史料3・37）、尾張側の北方・黒田・飛保など、境目近くの地に、西軍方から調略の使者が潜入し活動。
 - ・ 清須城主福島正則はじめ、東軍諸将が続々と尾張に着陣。家康が正則ら東軍諸将ならびに尾張衆に、井伊直政の指図に従うよう指示（史料5・6）。
 - ・ 家康は、福島正則（西軍の勧誘対象でもあった）に、8月4日付で「尾州明地所務等之儀」に関する権限を付与（史料7）。事実上、尾張のほぼ半国を占める豊臣蔵入地の支配権を認める。尾張衆（「秀頼之馬廻衆」）の大部分も正則の旗下で東軍として参戦することとなる（史料35・36）。
 - ・ 三成は、8月8日に秀信とともに「尾州表」へ「罷出」ることを明言（史料9・12）。しかし自身が木曽川を越すことはなかったとみられる。
 - ・ 正則が西軍に内応しないケースを想定して、織田信雄（常真）に尾張を返付する案が浮上か（史料20）。織田家旧臣の大名や尾張衆の内応、はたまた尾張・伊勢の地下人一揆の加勢を期待（史料38）。
 - ・ 西軍として尾張国内で孤塁を守る形となった犬山城主石川光吉や秀信与力の美濃衆（加藤・稲葉・竹中ら）が家康と使者のやりとり（史料10・13）。
 - ・ 家康の先勢として遣わされた井伊直政・本多忠勝らの到着が、直政の急病により遅れる中、8月19日、清須城で家康の使者村越直吉と東軍諸将が軍議。家康の着陣を待たず木曽川を越し、岐阜城攻略に踏みきることを決定＝清須軍議（史料19）。同日中もしくは翌日に、井伊・本多が加わり再度の軍議。
- 【小括】 8月中旬までの段階では、東西両軍ともに木曽川を越して戦いを優位にすすめることを目指した。石田三成らの期待に反し、家康打倒の呼びかけに支持は広がらず、西軍による尾張侵攻の橋頭堡となるはずであった犬山城の在番衆は日和見の姿勢に終始した。井伊・本多両将不在のまま8月19日に開かれた清洲軍議で、東軍は渡河・岐阜城攻略を決定し、機先を制することとなった。

2 東軍の美濃侵攻と戦局の転回

- ・ 8月22日、東軍が二手に分かれて木曽川を越し、美濃側に侵入（史料21・23・25・26）。
 - 川上の河田で渡河：池田・浅野・山内・有馬・堀尾・一柳ら
 - 黒田城主の一柳直盛が案内し先導。米野・革手・新加納で織田秀信勢と戦い勝利。
 - 川下の萩原・起で渡河：福島（尾張衆が従軍）・細川・京極・黒田・加藤・藤堂・田中・井伊・本多ら
 - 22日に美濃側の加賀野井に上陸し竹鼻城を攻撃。二ノ丸を守備する毛利広盛らが降伏し、城主杉浦重勝は自刃し落城。
 - ※萩原から木曽川（現日光川）を渡河した福島勢は、西軍方の「打廻の足軽」と遭遇（史料21）し追い散らす。境目近接地域の農村部に対する内応工作や破壊工作を担当する部隊か。
 - ※大垣に在城する石田三成は、この日の東軍の渡河作戦を傍観（史料23）。
- ・ 23日、東軍が再合流し岐阜城を攻撃。ほぼ無人の惣構を突破され、山上での激しい戦闘を経て秀信は降伏。

身柄を尾張へ送られる（史料21・25・26・35）。秀信家臣の斎藤織部（のち池田家に仕官）は、美濃国中が「一揆を申し」、岐阜・犬山・八幡の3城の通路が遮断されたため、「在々へ働き」、岐阜城での戦いに間に合わなかったという（史料39）。

※一揆の実態は不明ながら、秀信は美濃国内の地下人（地侍・百姓）らの武力を十全に動員できなかったことは間違いない。かわって元岐阜城主池田照政ら東軍諸将が、禁制の発給などを通じて村々を味方につけていった（史料17）。

・岐阜城への後詰に出陣した石田・小西・島津・宇喜多ら西軍は、黒田・田中・藤堂・加藤ら東軍と長良河畔の河渡で戦うが敗退し大垣城内にのがれる（史料21・26）。勢いに乗った東軍は、垂井・関ヶ原・山中を放火したのち、赤坂に陣取る。翌日より虚空蔵山に要害を築き、大垣城の西軍と対陣（史料21・27）。

※河渡の戦いの直後には、主戦場が佐和山城に移る（西軍が大垣城を放棄し撤退）との予測も（史料23・26）。

しかし三成らは、毛利輝元が後詰に出陣することに望みを託し、大垣城での籠城を続行（史料27）。

・木曾川下流デルタでは、赤目城の横井時泰、吉里城の徳永寿昌、今尾城の市橋長勝が、東軍方として西濃・上方への通路を確保（史料22）。横井・徳永・市橋が、西軍方の丸毛兼利の拠る福東城を攻略。その後、高木盛兼の拠る高須城も攻略し（史料40）。大田山城に陣取る西軍の原長頼と対峙。

※後世の書では、福東城攻撃の開始を8月16日、高須城攻撃開始を同19日とするものがあるが（史料40）、

19日の清洲軍議で横井時泰が村越直吉と同席したとみられ（史料24）、検討の余地あり。

・岐阜落城により孤立する形勢となった犬山城は、8月末頃開城（史料29・30）。加藤貞泰・竹中重門はそのまま東軍参加（史料31）。稲葉貞通は居城八幡城を東軍方遠藤慶隆・金森長近に攻められ、郡上へ急行。和睦後、西軍の桑名城主氏家行広らと対峙する長島城の福島高晴のもとへ援軍として赴く（史料32）。

・8月25日に富田信高の拠る伊勢安濃津城が開城。攻城側の毛利秀元・吉川広家・安国寺恵瓊・長束正家・長曾我部盛親らの軍勢が、伊勢から美濃へ移動。その後、南宮山とその周辺に陣取る（史料43）。

※但し、安濃津城攻めで中国勢は夥しい戦死・手負を出し、その戦力は激しく損耗。

・村上景広・乃美景継ら毛利水軍が、菅達長ら上方の水軍とともに九鬼嘉隆の志摩水軍と合流。伊勢大湊から尾張側に渡海し、知多郡西部を中心に浦々を襲撃し放火などを働いたうえ、野間・内海で合戦（史料41）。

※東軍方は、これら海上からの攻撃を、すべて九鬼勢によるものと認識か（史料0・28）。

※毛利水軍の伊勢湾来航は、当初、家康の西上に合わせて輝元が出陣する予定であったことを反映するもの。

岐阜落城以降、濃尾での戦局が大きく西軍不利に傾き、輝元の出陣が見送られたとみられる。大坂の輝元および二奉行（増田・徳善院）らと、最前線で敵と対峙した三成との温度差が露呈。

※家康は千賀重親・信親父子を師崎に派遣し、九鬼氏らによる三河湾方面への攻撃を防ぐ（史料42）。

【小括】岐阜城が呆気なく攻略され、河渡の戦いでも西軍が敗れたことで、主戦場は西美濃に移ることとなった。市橋・徳永・横井ら東軍の別働隊は福東・高須両城を攻略して木曾川下流デルタの制圧をすすめ、長島城の福島高晴は西軍方の桑名・太田山両城と対峙した。海上では、九鬼氏の水軍に毛利氏の瀬戸内水軍、上方の水軍が合流し、知多半島西岸で猛威をふるったが、陸上での東軍優位の態勢が動くことはなかった。赤坂に陣取った東軍と大垣城で対峙した三成らは、毛利輝元の大軍が大坂から後詰めに陣出して局面を開くことを期待したが、輝元の出陣は見送られた。かわって伊勢安濃津城攻めを終えて南宮山に着陣した毛利秀元・吉川広家らの軍勢は激しく損耗していた。大垣・赤坂間で睨み合いと小競り合いが続く中、家康が赤坂に着陣したことを受け、ますますの窮地に陥った三成らは、西方の関ヶ原に退き、山間の地形をバックに捨て身の決戦を挑むことに決したとみられる。

おわりに

- ・石田・大谷両将が決起した慶長5年7月から関ヶ原合戦当日（9月15日）までの間に、広大な濃尾平野全域で、大小さまざまな戦いが展開した。はたしてこれらは単なる「前哨戦」であったのか？むしろこれら一連の戦いにより、9月15日の本戦の帰趨が大部分決したのではなかったか。
- ・関ヶ原合戦当日の小早川秀秋の「裏切り」は、たしかにその日の戦いの流れを大きく変えるものであったが、当日にいたるまでの戦局の流れに照らしてみれば、順当至極なものであったともいえる（史料28）。
- ・ともあれ合戦翌日の早朝、南宮山から毛利秀元勢が撤退。徳永勢および郷人らの攻撃（落武者狩り）をかわして近江伊吹山麓へのがれたという（史料44）。合戦時に市橋・徳永・横井の軍勢が金屋河原に陣を敷き、牧田で安国寺・長宗我部の軍勢と戦い軍功を挙げたことが後世に伝わるが（史料40）、実際は地下人らを動員しての落武者狩りだったとみられる。
- ・時代の変化をどう読むか。木曾川筋をめぐる3つの戦いはどう違うのか？

1)大規模化：戦国大名間の「国郡境目相論」から天下分け目の戦いへ

2)長期持久戦から短期決戦へ：10年以上を要した斎藤・織田の戦いから、8か月にわたる小牧・長久手の戦いを経て、2か月で決着した関ヶ原の戦いへ。

要因：①武将たちの人間関係の濃密化：ほぼ全員が顔見知りであった政権内を二分した戦い。

②在地の武力のあり方：秀吉による天正16年（1588）の刀狩令はどう影響したか？

戦国期の戦いでは、外部からの侵略に地下人（地侍・百姓ら）の武力（一揆）が立ちはだかり、進軍経路の確保を妨げる（総力戦の構図）。一進一退の攻防が続き、戦いはしばしば長期化。

⇒豊臣政権により、地下人一揆を起こさせないことを第一の目的とする刀狩令布告。

⇒慶長5年の戦いでは、西軍が織田信雄を起用して尾張・伊勢国内の一揆を誘発する企てが垣間見え、岐阜落城直前には美濃国中で広範囲で一揆が発生。また関ヶ原合戦後には、武装した地下人らによる落人狩りもおこなわれた。地下人一揆は、依然として健在であった。

刀狩令が禁じたのは、武器を手にした百姓らが、権力への不服従を目的に一揆を起こすこと。

いざ戦争が起これば、以前と同じく、権力側は地下人一揆を都合よく利用しようとした。

③一番大きく変化したのは、大名・領主と在地社会との関係：織豊政権は、（そもそも領国の防衛を想定外に置く）全国統一戦・対外侵略戦争を遂行する過程で、大名・領主の「鉢植化」を推進。短期間で領主がめまぐるしく交替した濃尾では、領主と在地社会の繋がりが従来より希薄化。その弱点が、現領主が旧領主に攻め込まれる状況下において露呈した結果が、岐阜城の早期落城であった。

⇒慶長5年の戦いでは、豊臣政権下で一旦過去のものとなった「国郡境目相論」が、濃尾で局地的に再発した。そうした例外的事態に見舞われる中で、もはや多くの豊臣大名が、旧来の戦国争乱のように、地域社会に根ざした領国防衛体制を構築し戦争に臨むことが困難であることが示された。こうした点は、豊臣大名のみならず、近世大名にも共通。

- ・江戸時代には木曾川下流デルタの一部が尾張藩領となるが、尾張藩は今尾（旧城主市橋氏は伯耆八橋に転出）に家老竹越氏を配し、竹越氏は今尾城址に陣屋を営んだ。また同じく家老の石河氏は駒塚に、尾張藩重臣となった横井氏は赤目に、毛利氏は八神に在所屋敷を営んだ（八神の毛利屋敷の絵図が今回の企画展に出陳）。のちに高須藩（初代藩主は吉里から移った徳永寿昌）は尾張徳川家の庶子が継承する。これらの陣屋や在所屋敷は、一国一城の体制が確立された後も、非常時に一定の軍事的役割を担うことを暗黙裏に想定し配置されていたと思われ、当該地域で展開された戦乱の記憶が、近世尾張藩にも継承されていたことを示している。

【図1】石田三成人数書立にみる西軍の戦略¹⁾（慶長5年8月上旬）

伊勢口	500 戸田武蔵（勝成）
41500 毛利中納言殿（輝元） このうち10000 息藤七郎殿（秀就）につける。30000 余は輝元自身が召し連れて出馬。	500 福原右馬亮（長堯）
18000 秀家（宇喜多）	300 溝口彦三郎（溝江）
8000 筑前中納言殿（小早川秀秋）	300 上田主水（重安）
2100 土佐侍従（長宗我部盛親）	500 寺西下野（是成）
3900 立花左近（宗茂）	500 奥山雅楽（正之）
1000 久留米侍従（小早川秀包）	2500 小川土佐（祐忠）・同左馬亮（祐滋）
500 筑紫主水（茂成）	1000 生駒雅楽（親正）
9800 龍造寺（高房）	2000 蜂須賀阿波守（至鎮）
1200 脇坂中務（安治）	6000 青木紀伊守（一矩）
300 堀内安房守（氏善）	800 青山修理（宗勝）
400 羽柴下総（滝川雄利）	以上 30100
400 山崎右京（定勝） ※城加番	瀬田橋爪在番
370 蒔田権介（広定） ※同	1020 太田飛騨守（一吉）・同美作守
390 中居式部太輔（中江直澄）※同	450 垣見和泉守（家純）
1000 長束大蔵（正家）	450 熊谷内蔵丞（直盛）
以上 79860	600 秋月長門守（種長）
美濃口	800 相良左兵衛（長毎）
6700 石田治部少輔（三成）	800 高橋右近（元種）
5300 岐阜中納言殿（織田秀信）	500 伊藤豊後（伊東祐兵）
1400 羽柴右京（稲葉貞通）・稲葉彦六（典通）	360 竹中和泉守（隆重）
5000 羽柴兵庫頭（島津義弘）	1500 中河修理（中川秀成）
2900 小西摂津守（行長）	520 木村弥一右衛門尉（秀望）
400 稲葉甲斐守（通重）	以上 6980
以上 25700	大坂御留守居
北国口	7500 御小性衆
1200 大谷刑部少輔（吉継）	8300 御馬廻
3000 若狭少将（木下勝俊）・同宮内少輔（利房）	5900 御弓鉄砲衆
5000 丹波七頭之衆	6700 前備・後備
2500 但馬式頭	10000 輝元（毛利）人数
700 木下山城守（頼継）	1000 徳善院（前田玄以）
800 播磨姫路衆	3000 増田右衛門尉（長盛）
2000 越前東郷衆	此外
	7000 伊賀に在番
	以上 42400
	都合
	184970

1) 真田宝物館所蔵（『愛知県史 資料編 13 織豊3』928号）。